主日礼拝７月３１日（日）
題　「苦しみの中での生き方」
テキスト：ペトロの手紙一　２章１８～２５節

皆さん、おはようございます。
今日の個所には召し使いたちに対するペトロの勧めが記されています。
家で働く奴隷のことだと思われます。主人の奴隷になっていたキリストたちに対する教えです。
今から１９００年以前のローマ帝国内では、奴隷制度がありました。
その頃、現在のトルコ地方に離散していたキリスト者たちの中には奴隷としてその主人に仕えていたいわゆる召し使いたちもいたのです。
ご存知のようにアメリカ合衆国では、長く奴隷制度がありました。
奴隷貿易によってイギリスを経由してアメリカに連れて来られたアフリカの人々が奴隷として働かされていたのです。アメリカでは１７７６年7月４日に今のイギリスからの独立宣言が出されています。
１８００年代まで続いたようです。アメリカの南北戦争が北部と南部の間であり、１８６１年～１８６５まで続き北部が勝利しました。１８６５年のアメリカ合衆国憲法修正第１３条の成立が公式に奴隷制度を終わらせたと言われています。憲法や法律は重要であることを改めて思わされます。一度変更されると変えることは困難だからです。わたしはアメリカの歴史に詳しくはないのですが、南北戦争が奴隷制度を終わらせた大きな分岐点になったのだと思います。多くの奴隷たちが南部で農作業などで働いていました。昔、「風と共に去りぬ」という映画に描かれていました。この奴隷たちの中で、苦しみの中で神に助けを求める今日まで残り伝えられている魂の歌であり神への賛美でもあるニグロスピリチャルといわれる黒人霊歌が生まれたのです。日本の讃美歌にも収められています。

それでは今日の聖書個所を共に学びましょう。
◆召し使いたちへの勧め
18:召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。
ペトロは、召し使いとなっているキリスト者たちに、主人に従うように語ります。当時、奴隷となった者が自由人となるのは、殆ど不可能に近いことだったのだと言われています。
それだけ厳しい時代であり厳しい制度があったということです。

ペトロの手紙には、国家や家族に服従することを強いる内容があるとして批判する人たちのいることは事実です。しかし、この教えは決して自由人になってはいけない、という教えではないとわたしは思います。その点は押さえておきたいものです。
奴隷制度は、現代を生きるわたしたちからみれば、考えられないことですし、認めることのできないことだと思わされます。当時は奴隷が主人の元から逃げ出すことは、その後、生きていけないこと、つまり死を意味することでもあったのです。
奴隷は主人の言うことは、何でも行い、逆らうことはできないのです。
しかし、奴隷制度ではないにしても、時代は異なっても、現代でも、このような束縛、支配とも言える関係の中を生きて行くしかないと思っているような人たちはいるのではないでしょうか。日本でも家族や組織の中で、従うしかない人間関係に支配されているような固められている存在もあるのです。
ドメスィックバイオレンスということばがあります。これは「配偶者や恋人など親密な関係がある、またあった者から振るまわれる暴力」のことです。表には出てこなくてもあるのです。ほとんどは女性が男性から受ける暴力のことです。言葉などによる暴力など様々な形はありえると思います。

　さて、聖書では「善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。」と言われます。中には善良でやさしい、寛大な主人もいたのです。しかし、「無慈悲な主人」とは、いじわるで気難しいとの意味であると言われます。そのような主人もいたのです。「無慈悲な主人にもそうしなさい。」とあります。この背景には、「万物の終わりが近づいている。」との意識で生活していたこともあるようです。ただ、主人に従わなければ、生きていくことの出来ない現実があったのだと思うのです。留まることも逃げることもできない、極限の苦難の状況と言えるのかもしれません。

　一体、人は何を持ってそのような厳しい、苦しい境遇に耐えて生きることができるのでしょうか。
すでに自由を知った現代人には考えにくいことかもしれません。
ペトロは語ります。
19:不当な苦しみを受けることになっても、「神がそうお望みだとわきまえて」。分かりにくいですが、これは、耐えがたい苦しみの中で、「神がそうお望みだとわきまえて」とは、「神を思って」ということです。耐えがたい苦境の中で、イエスを思い、神を思って耐える、生き方。そうすることしかできない、

それはできる、しかし、そうしてその日その日を自分を保って何とか生きるのです。生きることはできるのです。ともかく生きることが大切なのです。「それは御心に適うことなのです。」それも神さまの恵みなのです。
その時、その人は神からの恵みを受けているということです。
　決して奴隷制度を認めたり、良しとする教えではないのです。また今日の個所を奴隷制度を認める教えとして利用してはならなのです。また、忍従を強いることではないのです。
　むしろキリスト者として、苦境の中でも、心の自由と尊厳を保たせてもらえ生きるのだとの教えと受けとめます。
　わたしは、主イエスが十字架を前にして、ゲッセマネの園で祈られた祈りを思い出すのです。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」と。イエスも、この杯、十字架を取りのけてもらうことを切に願い祈られたのです。わたしも昔、自分ではどうすることもできない苦境の中で、この祈りを切に祈ったことがあります。皆さんでもそういう方はおられることだと思います。わたしの場合、願っていた状況にはなりませんでしたが、生き延びることはできました。いまでは神さまがそうしてくださったと信じることはできます。本当にこのイエスさまの祈りに助けられたと思います。
　強いられて行う時、自らの心の内に、あきらめと卑屈な絶望的な思いが生じます、しかしどのような困難な状況でも、自らが引き受ける時にはそれは神への奉仕になり得るのです。希望を捨てず、自らの意思で行うことがいかに人間にとって大切なことでしょうか。その時、生き延びる奇跡が起こり得るのです。ここにキリスト者の自由があるのだと思うのです。

20:罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。
　キリストにある者は、罪の支配下に入らず、たとえどのような境遇にあっても善を行なうのです。たとえそれで苦しみを受けることがあったとしてもです。
　これは本当の意味で自由で練られた生き方だと思います。

「21:あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。」

イエス・キリストご自身がわたしたちより先に、先行する生き方を示してくださったのです。苦しみの中にあっても愛なる神さまに守らるという行き方です。神さまは自分を頼る者たちを決してお見捨てになることはないのです。
模範はすでにあるのです。主イエスの足跡をたどって行くのです。それで良いのです。それは命につながる道なのです。

この後、ペトロは旧約聖書のイザヤ書５３章の「苦難の僕」の言葉を用いて主イエスの生き方と重ね合わせながら自分のことばとして語っています。
ペトロも苦難の経験をしながらイエスについていった人なのです。

22:「この方は、罪を犯したことがなく、／その口には偽りがなかった。」
23:ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。
24:そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってわたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。
25:あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

わたしは讃美歌５１７番を思い出します。
「『われに来よ』と 主は今、やさしく呼びたもう。などて愛のひかりを　避けてさまよう　「かえれや、わが家に 帰れや」と主は今呼びたもう」

今日の個所は、決して奴隷制度を認める個所ではなく、神さまとイエス・キリストの愛を受けた者として、苦しみの中にあっても自分自身を保ち、自分の意思で善を求めて生きるキリスト者の歩む道を示しているのだと受けとめます。
そのことを私たちもそれぞれに与えられた生き方の中に表したいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。